

③ 学問、思想、教育



わが国初の西洋法律書翻訳

つ だ ま みち
津 田 真 道

(1829 ~ 1903 年)

法学者・政治家。通称は真一郎、のち真道と改名。東南条郡林田町（現津山市上之町）の津山藩料理番津田七太夫の長男として生まれる。

漢学・国学につうじ、武術・兵学などにも積極的に取り組み、幼少より学問・武芸に精励した。「坐臥常に巻を積すてず」と伝えられるように、最も好んだのは読書であったという。家業は、真道の不器用を理由に二男鉄治郎が継ぐことになった。その直後に藩儒の助教に取り立てられ、ついで藩主から褒美を受けていることからして、真道が逸材であることを見抜いた措置とも考えられる。

1850年（嘉永3）には江戸へ遊学する。箕作阮甫から蘭学を、佐久間象山らから洋式兵学を学ぶとともに、勝海舟らとも交わり、長崎へ赴いた後に再び江戸に戻る。箕作の塾頭、幕府の蕃書調所教授手伝などを務め、この間に西周らと西洋哲学や政治学を研究する。

1862～'65年（文久2～慶応1）に幕命によりオランダのライデン大学に留学したことが、その後の活躍の母体となった。オランダで自然法、国際法、憲法学、経済学、統計学などを学び帰国。'66年（慶応2）にわが国初の西洋法律書となる『泰西国法論』を翻訳・刊行する。

幕臣となり開成所教授職、明治になると大目付を務め、ついで刑法官権判事、判事兼外務権大丞などを歴任する。1871年（明治4）には日清修好条規の締結に当たり、副使とし

て中国へ赴く。

また1874年（明治7）には、箕作秋坪、福沢諭吉、森有礼らとわが国最初の学術団体となる明六社を創立する。以後は「開化を進むる方法を論ず」「夫婦同権論」などの開明的・啓蒙的な論説を機関誌「明六雑誌」に数多く寄稿した。明六社は後の東京学士院へとつながり、自身も'79年（明治12）に東京学士院会員となる。

1890年（明治23）東京府から衆議院議員に当選して、初代の副議長を務める。'92年（明治25）に衆議院議員に再選、つづいて'96年（明治29）には貴族院議員となって、政治家としても大いに活躍する。

1900年（明治33）には華族に列せられ、男爵を授けられる。また'03年（明治36）には法学博士の学位を受領した。明治期のわが国の法曹界、政界における活躍にはめざましいものがある。

